

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16683

研究課題名(和文)現代オントロジーの観点からの「世界」概念の探究

研究課題名(英文) Investigations on the Concept of the World from the Viewpoint of Contemporary Ontology

研究代表者

北村 直彰 (Kitamura, Naoaki)

京都大学・文学研究科・特別研究員(PD)

研究者番号：60771897

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代オントロジーにおいて用いられる基本的諸概念をもとに、世界全体の形而上学的本性を解明することを目指した。特に、次の四つの課題に取り組んだ。(1) 形而上学的一元論の擁護可能性の検討、(2) 階層的世界観の擁護可能性の検討、(3) 存在者の総体としての世界と非存在の関係の解明、(4) 实在論と反实在論との間の形而上学的対立の明確化。これらを通じて、多様な存在者と事実からなる階層的な構造をもちつつもそれらの諸部分に先行するもっとも基礎的な存在者として世界全体を捉える一元論的立場の理論的利点を、そのメタ形而上学的基盤とともに明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The present research aims to elucidate the metaphysical nature of the world as a whole on the basis of the basic concepts in contemporary ontology. In particular, we tackled the following four tasks: (1) the examination of the tenability of metaphysical monism; (2) the examination of the tenability of the layered conception of the world; (3) the elucidation of the relationship between existence and nonexistence; (4) the elucidation of the metaphysical conflict between realism and antirealism. As a result, we revealed the theoretical advantages and the metametaphysical foundations of the monistic position according to which the world as a whole is the most fundamental entity with a layered structure that comprises various kinds of derivative objects and facts as its parts.

研究分野：現代哲学

キーワード：オントロジー 存在論 形而上学 世界 一元論 実体 存在論的依存 基礎づけ

1. 研究開始当初の背景

現代オントロジーは、存在者の基本的な種類(カテゴリー)の画定と、それらの間の関係に関する考察を行うカテゴリー論を基本的な枠組みとし、分析哲学において蓄積されてきた様々な手法を駆使しながら、古典的な形而上学的問題に取り組んでいる。

しかしそうした枠組みにおいては、多種多様な存在者を分類し、それらの性質や相互関係を明らかにすることに主眼がかけられるため、多様な存在者の全体としての「世界」に関する考察が不十分なものととどまっていた。

2. 研究の目的

世界全体の存在論的身分に関する包括的研究の基礎部分として、以下の四つの課題群を設定し、それらの達成を目指した。

(1) 真の意味で存在するのは全体としての世界だけであるという立場(形而上学的一元論)の擁護可能性を検討する。

(2) 世界全体を複数の階層(物理学的事実・化学的事実・生物学的事実...といった諸階層)から成るものとして捉える見方の擁護可能性を検討する。

(3) 存在者の総体としての世界と、「非存在」ないし「無」がどのような関係にあるかを解明する。

(4) 世界の存在を心から独立したものと考える実在論とそれを否定する立場とがどのような形而上学的対立を含むかを明確化する。

3. 研究の方法

上記の四つの課題の達成のため、まず、(1)基礎的概念の明確化による準備作業を行い、そのうえで、(2)明確化された基礎的概念に基づいて具体的な形而上学的探究を行うという仕方、全体を大きく二つのパートに分割して研究を進めた。

(1) 本研究が目指す形而上学的・存在論的考察において基礎的な役割を果たす諸概念のうち、特に「本質」、「実体」、「存在論的依存性」、「形而上学的基礎づけ」という四つの概念に焦点をあて、それらの明確化を行った。その際には、主として近年の分析形而上学における先行研究を参照した。

(2) 上記の四つの課題に対する取り組みにおいては、(1)の準備作業への取り組みと同様に近年の分析形而上学における先行研究を参照したほか、現代オントロジー研究の重要な源泉としてのオーストリア哲学(特にA. マイノングの哲学)と現象学(特にE. フッサールの哲学)にも着目し、それらに含まれる重要な洞察を活かすことを全体の方針とした。

4. 研究成果

(1) 基礎的な存在論的概念の整備を通じて、以下・の成果を得た。いずれも、後述の(2)の成果の土台をなすものであるが、これらのうちは、世界の存在論的身分の問題という文脈から離れて見たときにもそれ自体として意義をもつ。その成果は、下記の学会発表の一部として公表したほか、論文として学術雑誌に投稿済みである。

「本質」概念を様相概念との関連において考察した。特に、クリプキによる可能世界意味論行以降主流となった、一種の必然的性質として本質的性質を定義するアプローチが抱える欠点と、形而上学的様相を本質に関する事実へ還元するアプローチがもつ利点を検討した。また、「存在論的依存性」概念と「実体」概念について、「本質」概念や形而上学的基礎づけ関係に基づいてそれらを定義するアプローチに焦点をあてながら考察した。特に、「本質」概念に基づいて種々の「存在論的依存性」を定義するK. Fineの議論、および、それへの反論と形而上学的基礎づけ関係に基づく代替案を提示するF. Correiaの議論を集中的に検討した。これらの取り組みにより、「存在論的依存性に基づくカテゴリーの個別化(と関係づけ)」というアイデアが精緻化されるとともに、絶対的な全体性をもつものとしての世界は「カテゴリー」概念の適用に関して理論的困難を抱えるものの、特異な「実体」性をもつ単一の個体として捉える余地があるということが明らかになった。また、それにより、「もっとも基礎的な存在者は全体としての世界だけである」というテーゼ(先行性に基づく一元論)を世界の実体性に基づいて擁護するアプローチに関して、「実体」概念の明確化をふまえて具体的に展開する見通しを得た。

形而上学的基礎づけ関係の論理的振る舞いに関する問題を考察した。特に、K. Fineによって提示された、基礎づけに関する標準的な論理的原理はその他の一般原理と不整合をきたすというパラドクスを解決するために、基礎づけに関する原理のうち、問題のパラドクスにとって本質的でありながらもこれまで十分に議論されていない原理を検討した。この取り組みにより、そうした原理はたんなる概念的説明を表すにすぎず、形而上学的な実質をもたないと主張するデフレ主義的なアプローチが有効であること、そして、問題のパラドクスは形而上学的説明と概念的説明との混同に由来すると考えられることを明らかにした。また、この考察に基づき、通常想定される「基礎づけの非対称性」という原理は、形而上学的説明に関してのみ成立するものとしてその適用範囲を制限できることを示した。これらの考察は、さまざまな形態をとるFine的パラドクスに統一的な解決策をあたえるものである。

(2) 上記の各課題への取り組みを通じて、以下の成果を得た。は、下記の学会発表の一部として公表した。また、と は、それぞれ論文として学術雑誌に投稿済みである。と は、本報告書提出時点においては公表する段階に至っていないが、それぞれをさらに発展させ、今後なんらかの仕方で公表する。

課題(1)に関しては、世界全体をもっとも基礎的な存在者とする一元論的立場を世界の実体性に関する主張という形で擁護する方策として、現代物理学の知見に基づく存在的構造実在論から一元論的主張を導く方針を検討した。それを通じて、実体概念に基づく一元論を、存在的構造実在論の示唆する全体論的立場として捉え直せることを明らかにした。特に、存在的構造実在論の基本的主張を「対象間の関係はそれらの対象に本質的なものだ」という主張として定式化する方針に基づき、対象間の関係から成る構造を一つの有機的全体として捉える立場を、現代物理学に依拠した存在論的主張として擁護した。

課題(2)に関しては、世界全体が備える階層的構造を形而上学的基礎づけ関係によって明確化する作業に取り組んだ。特に、基礎づけの事実そのものの基礎づけにまつわる問題(基礎づけの事実もまた基礎づけられていると考えると悪性の無限後退に陥り、基礎づけの事実そのものは基礎づけられていないと考えると、階層構造を特徴づける「基礎的/派生的」という区別が維持不可能になる、という問題)をどのように解決しうるかを検討した。それを通じて、この問題を構成する本質的要因を「基礎性」概念と基礎づけ関係に関するいくつかの一般的前提に帰しうることを明らかにするとともに、この問題に対する解決策として、世界全体があらゆる否定的真理を存在論的に基礎づけるという立場に基づくアプローチを擁護した。

課題(3)に関しては、非存在対象を存在論に組み入れるマイノング主義のメタ存在論に着目し、標準的なクワイン的メタ存在論とマイノング主義的メタ存在論の対立を、絶対的無制限量化と存在概念の関係に関する捉え方の対立として明確化する作業に取り組んだ。それを通じて、マイノング主義的メタ存在論の眼目を、「基礎づけ」概念に依拠して基礎的存在者と派生的存在者を区別する新アリストテレス主義的メタ存在論によって洗練させられることを明らかにした。

課題(4)に関しては、初期フッサールの超越論的観念論を、世界全体が意識に存在論的に依存していることを主張する形而上学的立場として解釈する方針を検討した。それを通じて、心身問題における汎心論の一形態としてフッサールの観念論を解釈・擁護する既存の議論をさらに洗練させる見通しを得た。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

北村直彰・森田紘平、存在的構造実在論の概念的基盤と経験的根拠、日本科学哲学会第 50 回大会、東京大学本郷キャンパス、2017 年 11 月 18 日

北村直彰、存在論的コミットメント・真にするもの・基礎づけ、日本大学文理学部人文科学研究科第 13 回哲学ワークショップ、日本大学文理学部、2017 年 3 月 14 日(招待あり)

〔図書〕(計 1 件)

[翻訳]スティーヴン・マンフォード(著)、秋葉剛史、北村直彰(共訳)、岩波書店、哲学がわかる一形而上学、2017、200

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者
北村 直彰(KITAMURA, Naoaki)
京都大学・大学院文学研究科・特別研究員
(PD)
研究者番号：6 0 7 7 1 8 9 7

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
森田 紘平 (MORITA, Kohei)
京都大学・大学院文学研究科博士課程